

五月雨

一葉稿

青空文庫

(一一)

池いけに咲さく菖蒲あやめかきつばたの鏡かがみに映うつる花はな一本ふたもと本ほんゆかりの色いろの薄うすむらさきか濃こむらさきならぬ
 白しろ元もと結ゆひきつて放はなせし文ぶん金きんの高たか髻まげも好おなみは同おなじ丈たけ長のさくら櫻もやう淡あつ泊さきりとして色いろをふく
 白しろ元もと結ゆひきつて放はなせし文ぶん金きんの高たか髻まげも好おなみは同おなじ丈たけ長のさくら櫻もやう淡あつ泊さきりとして色いろをふく
 姿すがたに高かう下げなく心こころに隔へだてなく墻かきにせめぐ同はら胞からはづかしきまで思おもへば思おもはるゝ水みづと魚うをの君きみ
 さま無なくは我われ何なんとせんイヤ汝われこそは大事だいじなれと頼たのみにしつ頼たのまれつ松まつの梢こずゑの藤ふぢの花はな房ぶさ
 かゝる主しゆう従じゆうの中なかまたと有ありや梨なし本ほん何なに某がしといふ富ふう家かの娘むすめに優いうこ子こと呼よばるゝ容きり貌やうよ
 し色いろ白しろの細ほそおもてにして眉まゆは※の遠とほ山やまがた花はなといはゞと比たと喩へを引ひくもこぢたけれど二
 月ぐわつばかりの薄うす紅こう梅ばいあわ雪ゆきといふか何なにか知しらねど濃こからぬほどの白しろ粉いものに玉たま虫むしいろの
 口くちべに紅ひんを品ひんよしと喜よろこぶ人ひとありけり十九じゅうといへど深しん窓そうの育そだちは室むろ咲さきも同おなじこと世よの風かぜ
 知らねど松まつ風ぜの響ひびきは通かよふ瓜つまご琴ことのしらべに長ながき春はる日ひを短みじかして暮くす心こころは如い何かばかり長なが
 閑どけかるらん頃ころは落らく花くわの三さん月げつ盡じんちればぞ誘さそふ朝あさあらしに庭にはは吹ふ雪きのしろ妙たへも流さ石すがに袖そでは
 寒さむからで蝶てふの羽はうらの麗うら朗らくとせし雨あまあがり露ぬれ椽ゑん先に飼かひ猫ねこのたま軽かるく抱だきて首くび玉たまの
 絞しぼり放はなし結ゆひ換かゆるものは侍こしもと女をとのお八や重へとて歳としは優ゆう子こに一おと劣おとれど劣おとらず負まけぬ愛あい敬けうの

片かた 齧たぐ 誰たれゆゑ寄よする目元めもとのしほの莞爾にっこりとして手てを放はなしつ不圖ふと見返みかへりて眉まゆを寄よせしが
 又また故をにホとと笑わらつて嬢じやうさま一寸ちよつと御覽遊ごらんあそばせ此このマア様子やうすの可笑をかしいことよと面白おもしろげに誘いざな
 はれて何なんぞとばかり立たち出いづる優子いうこお八重やへは何故なぜに其その様やうなことが可笑をかしいぞ私わたししには何なんと
 も無なきをと惱なやましげにて子猫こねこのヂヤレるは見みもやらで庭にはを眺ながめて茫然ぼうぜんたり嬢じやうさま今日けふも
 お不こころ快わるう御坐ございますか否いや左様さやうも無なけれど何どうも此處こゝがと押おして見みする胸むねの中うちには何なにが
 ありや思おもふ思おもひを知られじとか詞ことばをかへて八重やへやお前まへに問とふことがある春はるにつきての花はな
 鳥りで比くらべて見みて何なにが好すきぞ扱さても變かはつたお尋たづね夫それは心こころ々／＼でも御坐ございませうが歸鴈きがんが憐あは
 れに存ぞんじられます左さりとは異いなことで都みやこの春はるを見捨みすて、行ゆく情じやうなしがお前まへは好すきか憐あはれ
 といへば深山みやまがくれの花はなの心こころが嘸さぞかしと察さつしられる世よにも知られず人ひとにも知られず咲さきて散ち
 るが本意ほんいであらうか同じ嵐あらしに誘さそはれても思おもふ人の宿やどに咲さきて思おもふ人に思おもはれたら散ちるとも
 恨うらみは有あるまいもの谷間たにまの水みづの便たよりがなくは流ながれて知しられる頼たのみもなしマアどの位くらゐ悲あなしか
 らうと入いらぬ事ことながら苦勞くろうぞかして流なが石がに笑わらへばテモ嬢じやうさまは花はなの心こころを宜よく御存ごぞんじ私わたし
 が歸鴈きがんを好すきと云いふは我身わがみながら何故なぜか知しらねど花はなの山やまの曉あかつき月つき夜よさては春はる雨さめの夜半よは
 の床とこに鳴なきて過すぎる聲こゑの別わかれがしみ／＼と身みにしみて悲かなしい様やうな淋さびしいやうな又また來きる秋あきの
 契ちぎりを思おもへば頼母たのもしいやうにもあり故郷こきやうへ歸かへるといふからして亡なき親おやの事ことが思おもはれます

と打しほるれば夫は道理わたしでさへも乳母の事は少しも忘れず今も在世なら甘へるも
 のをと何ぞにつけて戀しければ子の身では如何ばかり心ぼそくも悲しくも有らうなれど及
 ばずながら私しは力になる心姉と思ふてよと頼むは可笑しけれど歳上なれば其約束ぞ
 何時もく云ふことながら私しは眞實の同胞と思ひますと慰められて嬉しげに御縁あれ
 ばこそ親どもばかりか私しまでめぐり廻つて又の御恩海とも山とも口には如何も申されね
 どお前さまのお優しさは身にしみて忘れませぬ勿躰なけれどお主様といふ遠慮
 もなく新參の身のほども忘れて云ひたいまゝの我儘ばかり兩親の傍なればとて此
 上は御座いませぬ左りながら悔しきは生來の鈍きゆゑ到底も御相談の相手にはなさ
 れて下さる筈もなし別ものに遊ばすと知りながらお恨みも申されぬ身の不束が恨めしう
 存じますとホロリとこぼす膝の露を優子不審しげに打まもりて八重は何が氣に障つてか思
 ひもよらぬ怨み言つもりて見よかし何の隔てゞ隠しだてをするものぞ母さまにさへ申さぬ
 ことも遂ひに話さぬ時はなきを今日に限つて其やうな事いはれる覚えは何もなければマア
 何と思ふてぞといふ顔じつと打仰ぎて夫々それが矢張りお隔て何故その様にお藏くし遊
 ばす兄弟と仰しやつたはお偽りか、偽りでは無けれど隠くすとは何を、デハ私しから
 申しませう深山がくれの花のお心と云ひさして莞爾とすれば、アレ笑ふては云はぬぞよ

(一一)

おもい入る路は一筋なれと夏引きの手引きの糸の乱れぐるしきは戀なるかや優子元來才は
 思ひ入る路は一筋なれと夏引きの手引きの糸の乱れぐるしきは戀なるかや優子元來才は
 じけならず柔和しけれど惻發にて物の道理あきらかに分別ながら闇らきは晴れぬ胸の雲
 にうつ／＼として日を暮らすをお八重しかぞと見て取りぬ我れも思ひの無き身ならねば他
 人ごとなりとも悲しきを假初ならぬ三世の縁おなじ乳房の寄りし身なり山川遠く隔た
 りし故郷に在りし其の日さへ東の方に足な向けそ受けし御恩は斯々此々母の世
 にては送りもあえぬに和女わすれてなるまいぞと寐もの語に云ひ聞かされ幼な心の最初
 より胸に刻みしお主の事ましてや續く不仕合に寄る方もなき浮草の我れ孤子の流浪
 の身の力と頼むは外になし女子だてらに心太く都會の地へと志ざし其目的には譯も
 あれど思ひはいすかのはしも無く尋ぬる人を引かへて尋ねぬならねど身に恥づれば我れと
 は訪はれぬお主のもとへ又見だされて二度の恩あるが中にも取分けて嬢さまの御慈愛は
 山の中の峯たかきが上も高く海の中の沖深きが上も深しお可愛や誰れ人を彼のやうに思
 しめして御苦勞なき身の御苦勞やら我身新參の勝手も知らずお手もと用のみ勤めれば出

入のお人多くも見知らず想像には此人かと思ゆるも無けれど好みは人の心々何が入
 お氣に染しやら云はで思ふは山吹の下ゆく水のわき返りて胸ぐるしさも嘸なるべしお愼
 み深さはさることなれど御病氣にでも萬一ならば取かへしとなるべきならず主は誰人
 えぞ知らねど此戀なんとしても叶へ參らせたし嬢さまほどの御身ならば世界に苦もなく
 憂ひもなく御心安くあるべき筈をさりとは又苦の世の中やと我身に比べて最憐がり
 心の限り慰められ優子眞實たのもしく深くぞ染めし初花ごろも色には出じとつゝみしは
 和女への隔心ならず有様は打明てと幾たびも口元までは出しものゝ恥かしさにツ
 イ云ひそゝくれぬ和女はまだ昨日今日とて見參らせし事も無きならんが婢女どもは蔭口
 にお名は呼ばずて光氏さまといふとかやお姿は察せよかし夫に引かれてゝは無けれど彼
 の人は父さま無二の御懇意とて恥かしき手前に薄茶一服參らせ初しが中々の物思ひ
 にて帛紗さばきの靜こゝろなく成りぬるなり扱もお姿に似ぬ物がたき御氣象とや今の代
 の若者に珍らしとて父様のお褒め遊ばす毎に我ことならねど面て赤みて其坐にも得堪
 ねど慕はしさの數は増りぬ左りながら和女にすら云ふは始めて云はぬ心は描かぬ畫もおな
 じ事御覽じ知る筈もあらねば萬一やの頼みも無きぞかし笑はるゝか知らねども思ひ初し最
 初より此願ひ叶はずは一生一人で過ぐす心憂きに送る月日のほどに思ひこがれて死ねば

よし命いのちが若もしも無情つれなくて如何いかに美うるはしき夫おくがた人むかへ給たまひぬとも愛あいらしき兒ちご生うまれ給たまふと
 も聞きく身みのつらさが思おもはるゝぞとてほろゝと打泣うちなけばお八重やへかなしく身みを寄よせてお前まへさま
 は何故なぜそのやうに御心おこころよわい事こと仰おほせられるぞ八重やへは元もとより鈍どんなり相談はなしてからが甲斐かひ
 なしと思おぼしめしてか馴なれぬ御使おつかひも一心しんは一心しん先方せんかたさまの様な御情おなさけしらずで有あらうと
 も貫つらぬかぬといふ事ことある様やうなし何なにともしてお望のぞみ屹度きつと叶かなへさせますものを御内端おうちばすぎでのお
 物もの思おもひくよく／＼斗ばか遊あそばせばこそ昨日きのふ今日は御顔色おいろもわるし御病おわづらひでも遊あそばしたら御
 ふたかた兩親ふたかたさまは更さらなる事ことなり申まをすも慮りよくわい外いもとおもながら妹いもと思おもはるゝとの御慈愛じあいに身みは姉あねうへ上ををも
 うけし心こころお前まへさま大切たいせつなほどお案あんじ申まをさすには居をりませぬを忌いまはしや何なにごとぞ一いつしやう生せい
 ひとりよ世よを送おくるの死しんで思おもひを遁のがれたしのと突つきつめた御心おこころに必かならずお成なり遊あそばすな
 と宥なだめる身みさへ眼めはうるみぬ、堪かん忍にんせよかし和女そなたにまで苦くをかけてあらぬ思おもひに心こころを盡つ
 くすが我が身みながら口惜くちをしきなり左さりとても彼かの人の事こと斷あきら念めがたきは何なにゆゑぞ云いはで止や
 まんの決けつし心しんなりしが親切しんせつな詞ことばきくにつけて日頃ひごろの憤つうみも失なくなりぬと漸いっしやう々々せまりくる
 んが氣きに涙なみだに咽むせびて良時やゝありしが、八重やへさぞ打うちつけなと惘あきれもせんが一いつしやう生せいの願ねがひぞよ
 このこゝろつた此この心こころ傳つたへては給たまはるまじや嬉うれしき御返事おへんじ聞ききたしとは努ゆめく々々思おもはねど誰たれ故ゆゑみじかき
 命いのちぞとも知しられて果はてなば本望ほんもうぞかしと打うちしほるれば、又またしても其その様やうなこと御前おまへさま

此々とお傳へ申さば好きお返事は知れた事なり最早くよくとお思しめすな、否やくとそれは八重が知らねばぞ杉原さまは其やうな柔弱な放なお人で無ければ申出してからが心配なり不埒者いたづら者と御怒りにならば何とせん、夫は餘りのお取こし苦勞岩木の中にも思ひのなきかは無情き仰せの有る筈なし扱も御戀人は杉原さまとやお名は何とぞ、三郎さまと申のなり此頃來給ひしは和女が丁度不在の時よ一足違ひに御歸宅ゆゑ知らぬのは道理と云ひかけてお八重の顔さしのぞき此願ひ若し叶はゞ生涯の 大恩ぞかし諄うは云はぬ心は是よと合はす手に嬉しき色はあらはれたり

(三)

雲雀のあがる麥生なゝめに見渡しながら岡のすみれを摘あらそひし昔は何の苦か有りし野河の岸に菊の花手折とて流れ一筋かち渡りし給ふ時我はるかに歳下の身のコマシヤクレにも君さまの袂ぬれるとて袖※かけて參らせしを如何に人にも笑はれけん思へば其頃が浦山し君さま 東京へ歸給ひし後さま／＼續く不仕合に身代は亂離骨廢あるが上に二親引つゞきての病死といひ憂きこと重なる神無月袖にもかゝる時雨

空からに心こころのしめる我われを取とらへて郡ぐんちやう長ながの悴せがれづらが些いさ少かの恩おほな鼻なにかけての無理むり難なん題だいや
 り返かへして遣やりたけれど女子をなごの身みは左様さやうもならず柳やなぎにうけるを宜よきことにして金かねやらん妾せうに
 なれ行ゆく々は妻つまにもせんと口惜くちをしき事ことの限かぎり聞きくに付けても君きみさまのことが懐なつかしく或あ
 夜よにまぎれて國くにを出いでつ漸やうく々こゝ東京とうきやうへは着つきし物ものの當處あてどなれば御行おゆく衛更ゑさらに知しるよしなく
 様さま々々の憂うき艱難かんなんも御目おめにかゝる折をりの褒ほめられ種ぐさにと且かつは心こころに樂たのしみつゝ賤いやしい仕
 業わざも身みは清きよし行おこなひさへ汚けがれずばと都みやこ乙女おとめの錦にしきの中なかへ木綿もめん衣類ぎものに管すげ笠がさ脚きやはん絆はづかし
 や女子をんなの身み不ふ似合にあひの菓くだもの賣うりも一重ひとへに活計みすぎの爲ためのみならず便たよりもがな尋たづねたやの一心しんな
 りしが縁ゑにしあやしく引ひく方かたありて不圖ふとよ呼び入いれられし黒塗くろぬり塀べいお勝手かたてもとに商あきなひせし時と後あと
 にて聞きけば御稽古おけいこがへりとや嬢じやうさまの乗めしたる車勢くるまほひよく御門ごもん内うちへ引入ひきいるゝとて出いでん
 とする我われと行ゆき違ちがひしが何なにに觸ふれけん我わがさしたる櫛くし車くるまの前まへにはたと落おちしを知らしらず曳ひき
 しかばなど堪たまるべき微塵みぢんになりて恨うらみを地ちに残のこしぬ嬢ぢやうさま御覽ごらんじつけて氣きの毒どくがり給たまひ此この
 そこねたるは我身わがみに取とらせよ代かはりには新あたらしきを取とらすべしとの給たまひしかど元もと來より落おせ
 しは我わが粗忽そこつなり曳ひかれしも道理どおり破損そこねしとて恨うらみもあらず況ましてや代かはりをとの望のぞみもなし是こ
 れは亡母なきはが紀念かたみのなれば他人ひとに奉たてまつるべき物ものならずとて拾ひろひ納あつめて懷ふとこにせしをいとゞしく
 御不ごふびん愆さてがり扱さては親おやも無なき人ひとか憐あはれのことや先庭まづにはぐち口くちより我わが部屋へやまで來こよ身みの上うへも聞ききた

してと連れ給ひぬ今こそ目馴れたれ御座敷の結構お庭のたゞずまひ華族さまにやと疑
 がひしは一に嬢さまの御言語容姿にも依りし物か其お美しく嬢さま御親切にも女子同
 志は互ひぞとて御優しき御詞我もしきりに嬉しくて尋ぬる人ありとこそ明さゞりしが種
 々との物語に和女の母御は斯々の人ならずやと思ひ寄らぬ御問ひ誠に若かぞ何と
 して御存じと云へば忘れて成るべきか和女と我れとは兄弟ぞかし我れは梨本の優な
 るをとて手を取りての御喜び扱は母が乳を參らせたる君なりしか御目にかゝりし嬉しさ
 に添へて落ぶれし身はづかしと打泣きしに榮枯は時なるものを歎く事かは萬は我れに委せ
 よかし悪るき様にはなすまじければ今日より此處に身を落つげずや母様には我れ願はん
 とて放し給はず夫様も又くれ／＼の仰せに其まゝの御奉公都會なれぬ身とて何ごと
 も不束なるを彼は彼此は此と陰になりてのお指圖に古參の婢女も侮どらず明日の我れ忘
 れし様な樂な身になりたるは嬢さまの御情一なり此御恩何として送るべき彼の君さま
 に廻り逢はゞ二人共々心を合せてお話し相手に成るべきをと何につけても忍ばるゝは
 又彼の人の事なりしが思ひきや嬢さま明日今日のお物思ひ命にかけてお慕ひなさるゝ主
 はと問へば杉原三郎どのとや三輪の山本しるしは無けれど尋ぬる人ぞと知る悲しさ御
 存じ無ければこそ召使ひの我れふし拜みてのお頼み嬢さま不憫やと思はぬならねど彼の

人何として取持たるべき受合ては立ちし物の此文には何の文言どういふ風に書きて
 有るにや表書きの常盤木のきみまるとは無情ひとへといふ事か岩間の清水と心細
 げには書き給へど扱もく御手のうるはしさお姿は申すも更なり御心だてと云ひお學
 問と云ひ欠け處なき御方さまに思はれて嫌やとはよもや仰せられまじ我れ深山育ちの
 身として比べ物になる心はなけれど今日までの憂き苦勞は何ゆゑぞ逢はんと思ふ夫一に萬
 の願ひをかけ置きしに今日の前逢ふ日は來ても逢ふが悲しき事義に成りぬ嬢さまの御恩
 は泰山の高きも物の數かはよしや蒼海に珠を探れと仰せらるゝとも夫に違背はずまじ
 けれど我が戀人周旋んことどう斷念めてもなる事ならず御恩は御恩これは是なり寧そ
 お文取次いだる体にして此まゝになすべきか否やく夫にては道がたゞず實は斯々の中
 なりとて打明けなば嬢さま御得心の行くべきか我こそは夫で宜けれど彼れほどまでに思
 しめし入れたもの左らばと云ひて斷念のつく筈なし我身の願ひが叶へばとて現在お心
 知りながら夫もつらし是れも憂しと迷ひに心も夕暮の空お八重つく／＼詠むれば明日
 も晴日か西の方のみ紅るの雲たな引きぬ

をとこをんなはふしわらはかほ
 男も女も法師も童も容貌よきが好きぞとは誰れ色好みの言の葉なりけん杉原三郎と呼
 ばるゝ人面ざし清らかに擧止優雅たが目に見ても美男ぞと見ゆればこそは罪つくりなれ我
 ゆゑに人二人まで同じ思ひにくるしむ共いざやしら樅の若葉の露かぜに散る夕ぐれの散歩
 がてら梨本の娘病氣にて別荘に出養生とや見舞てやらんとて柴の戸おとづれしに
 お八重はじめて對面したり逢はゞ云はんの千言百言うさもつらさも胸に呑みて恩とも
 言はず義理とも言はず沸かへる涙も人事にして御不憫や嬢さま此程よりのお煩ひのも
 とはと云はゞ何ゆゑならず柔和しき御生質とて口へとは出し給はぬほど猶さらには御いと
 ほしお心は中々我が云ふやうな物にはあらず此お文御覽ぜばお分りになるべけれど御前
 さま無情お返事もし遊ばされなば彼のまゝに居給ふまじき御決心ぞと見る目は如何につ
 らからぬ事か久し振りにて御目にかゝりし我身の願ひ是れ一なり叶へさせ給はゞ嬉しかるべ
 きをとて取次ぐ文の思ひ切りても涙ほろほろ膝に落ちぬ義理といふもの世に無かりせば云
 ひたきこといと多し別れしよりの辛苦は如何に或る時はあらぬ人に迫まられて身の遁れば
 の無かりし時操はおもし命は鷲毛の雪の夜に刃手に取りしことも有けり或時はお行衛た
 づね詫て恨みは長し大河の水に沈む覺悟も極めしかど引れし後髪千筋にはあらで一

とすぢ 筋に逢ふといふ日を頼みにして今日までも過せし身なりと云ひたけれど嬢さまの戀も我が戀にも浅さ深さのあるべきならず我れまだ其事を口にせねば入譯御存じなきこそよけれ御恩がへしにはお望み叶へさせまして悦び給ふを見るが樂しみぞと我れを捨ての周旋なるを他しごとは思ふまじ左るにても君さまのお心氣づかはしと仰ぎ見れば端なくも男はじつと直視ゐたりハツと俯向く櫛紅葉のかけ美るはしき秋の山里に茸がりして遊び昔しは蝶々鬚の夢とたちて姿やさしき都 風たれに劣らん色なるかは愁ひを含めど愛らしき雨の撫子しほれて床し三郎の心何と知らねど優子の文を手にとりつ浅からぬお心辱けなしとて三郎喜こびしと傳たへ給へ外ならぬ人の取次こと更に嬉しければ此文は賜はりて歸宅すべしとて懷中に押いれつゝ又こそと坐を立つに扱は嬢さまの心汲とり給ひてかと嬉しきにも心ほそく立上る男の顔そと窺ひてホロリとこぼす涙を藏くし嬢さまにも嘸ぞお喜び我身とても其通りなり御返事屹度まちますと云えば點頭ながら立出る廻り椽のきばの橘そでに薰りて何時か月に中垣のほどり吹のぼる若竹の葉風さら〜として初ほと〜ぎす待べき夜なりとやをら降たつ後姿見送る物はお八重のみならず優子も部屋障子細目に明けて言はれぬ心 《こゝろ〜》を三郎一人すゞしげに行々吟ずる詩きゝたし

(五)

便りまつ間の一日二日嬉しきやうな氣づかひな八重に遠慮は入らぬものゝ又言ひ出すか
 と思はるゝも恥かしくじつと堪ゆる返事の安否もしやと思へば萬一やになるなり八重は大
 丈夫と受合へど夫は氣やすめの詞なるべし彼の文とても御受取になりしやならずや其
 場で其ま御突き戻しになりたるを我れに力落させまじとて八重の繕ひて居るにはあらず
 や否や八重として其様のことある筈なし人を疑がふは罪ふかき事なり一日二日待
 給へ好き御返事の參るは定ぞと言ひしに違ひは無かるべし若しさうならば何とせん八重
 は上もなき恩人なれば何ごとなり共氣に入ることとして悦ばせし歳は下なれど分別ある
 ひとことばく人なれば願ひは有や望みはなしや知れ難きを何とせん扱も人妻となりての心
 人として言少なれば願ひは有や望みはなしや知れ難きを何とせん扱も人妻となりての心
 ゝろえむすめときこと異なる物とか御氣に入らば宜けれど若し飽かれなば悲しき事よ先それよ
 りも覺束なきは彼の文の御返事なり御覽にはなりたり共其まゝ押まろめ給ひしやら却り
 て御機嫌をそこねもして愛想づかしの種にもならば云はぬに増る愁らさぞかし君さまこそ
 無情とも思ふ心に二は無し不孝か知らねど父様母さま何と仰せらるゝとも他處ほかの

た 誰れ良人に持べき八重は一 生良人は持たずと云ふものから我が身とは自ら異りて關係
 はることなく心 安かるべし浦山しやと浦山るゝ我をば知らで吐息をもらしぬお八
 重はつく／＼有し日の事を思ふに 男 心の頼みがたきよ我れ周旋する身として事整ふ
 は嬉しけれど優子どのゝ心宜く見えたり三郎喜びしと傳へ給へとは餘りといへど昔しを
 忘れ給ひしお詞なりおもふは我が身の妬みにやお主様ゆゑには身を殺して忠義を盡くす人
 さへ有るを我一人にて憂きをしのばゞ何處も事なく納まるべきなり何氣なき嬢さまが八重
 や八重やと相談相手に遊ばすを御恨み申は罪のほども恐ろしゝ何ごとも残さず忘れてお主
 さまこそ二代の御恩なれ杉原三郎といふお人元來のお知人にもあらず況てや契りし
 事も何もなし昨日今日逢しばかり若かもお主さまの戀人に未練のつながる筈はなし御縁
 首尾よく整のへて睦ましく暮し給ふを見るが切めての樂しみなり我れは望みとて無き身な
 れば 生涯 涯 この家に御奉公して御二方さま朝夕の御世話さては嬰子さま生まれ給ひ
 ての御抱き守り何にもあれ心ろを責めて仕へんか夫は何としてもなる事ならず兎ても角ても
 憂き世なれば人訪はぬ深山の奥にかき籠りて松風に耳を澄まさば宜かるべけれど夫すら彼
 の人見捨てゝは入り難かるべしとてつく／＼と打敷けど人に見すべき涙ならねば作り
 笑顔の片頬さびしく物案じの主慰めながら我れ先づ乱るゝ尊の戀はくるしき物なるにや

成るとは見えて覺束なき人の便りをまつとは云はず杉原さまはお廿四とやお歳よりは
 老けて見え給ふなり和女は何と思ふぞとて臙氣なこと云ふて見る心や流石に通じけんお
 八重一日莞爾やかに嬢さまお喜び遊ばす事あり當て、御覽じろと久し振りの戯れ言さりと
 は餘りに廣すぎて取り處が分らぬなりと微笑ば左らば端を少し聞かし參らせんお前さま
 何より何よりお嬉しと思しめす事が有べし夫なりとて容易は言ひもせず夫ぞとは知れど
 猶も知らぬ顔に八重が例に似ぬことよ先づ云ふて聞かしても宜きそうなど打怨ずれば其
 やうに御いそぎなされますなど打笑ひながら彼の君より御返事が參りしなり是がお嬉し
 からぬ事かと呟かれて耳の根くわつと熱くなりつ胸とゞろかれて嘔む袖の下に密と置く藻
 しほぐさ俄には手にも取らぬをお八重察して進めつ、取まかなひて封を切らずに文にはあ
 らで一枚の短冊なりけり兩女ひとしく見る雲形

茂りあふわか葉にくらき迷ひかな

みるべきものを空の月かげ

意味の存する處何方ぞや茫として闇きわか葉のかけいとゞ迷ひは茂り合ふばかり晴るゝよ
 し無き空の月の心 《こゝろく》に判じて見れど何れ眞意と得ぞわき難く喜こぶべきか
 歎くべきかお八重はお八重優子は優子斯く云はれなば斯くせんの決心互に堅けれど思ひ

の外なる返しには何と定めて何とせん未練は流石ありそ海のおきて見つ又取りて見つなが
 めに飽かねど吐息されて八重はマア何と思ふぞと人の詞を待て見るあな覺束なの三十一
 文字や

(一六)

怪しや三郎の便りふつと聞えず成りぬ待つには一日も侘しきを不審しかりし返事の後今日
 や來給ふ明日こそはと空だのめなる日を重ねて十日半月さては廿日憂き身につらき卯月
 も過たり五月雨ごろのしめり勝に軒の忍艸は我が類ひの引きては葺かねど池のあやめの根
 ながき思ひにかき暮らされて袖にも水かさの増さりやすらん此處は別莊の人氣も少くな
 く氣に入りの八重を置ては別莊守りの夫婦のみなれど最愛の娘病氣との事なり本
 宅よりの使ひ絶ま無ければ事によそへて杉原のこと問はするに本宅にも此頃さらには
 參り給はずといふ左るにても何とし給ひしにや我心をさなくて卒爾に文など參らせ
 たるを如何に厭はしと思しなから返しせざらんも情なしとて彼れよりは夫となく御出のな
 きか此頃のお哥の心は如何に茂るわか葉の今こそは聞らけれど時節を待たば空の月の逢

みるべきぞとならば嬉しけれど若しやの願ひに左様見ゆるにや寧そ愁らからば一筋ならで
 頼みのある丈まどはるゝなり扱もお便りの聞えぬは何故我れ厭はせ給ひなば此處へこそ御
 入來なく共本宅へまで御疎遠とは不審しゝ夫ほどまでに御嫌ひになるほどなら優しげな
 御詞なげ仰せおかれけん八重が思ふも恥かしきまで彼の時は嬉しかりしを此まゝに見返
 りもし給はずは今さら面ても向けがたし悲しき事よと娘氣に頼みをかけて見つ又ときつ
 思案にもつゝ燃糸の八重が歎きは又異なり茂る若葉の妨げと仰せられしは我が事なら
 ずや闇き迷ひと歎じ給へど夫れ悟りたればこそその御取持ちなれ思ひ合ふ中のお兩方に我
 が生涯の望みも頼みも御譲り申して思ひ置くこと些少なきを何はゞかりての御遠
 慮ぞや身を觀すれば御恨みも未練も何もあらずお二方さま首尾とゝのひし曉には潔よく
 斯々して流石は貞操を立るとだけ君さまに知られなば夫を思での我れなるに此身ある故
 に嬢さまの戀叶はずとせば何とせん身退ぞくは知らぬならねど義理ゆゑ斯くと御存じにな
 らば御情ぶかき御心として人は兎もあれ我よくばと仰せらるゝ物でなし左らでも御弱
 きお生質なるに如何つきつめた御覺悟をも遊ばすまじき物ならず御最愛のお一人娘とて
 八重や何分たのむぞと嚴格い大旦那さまさへ我身風情に仰せらるゝは御大事さのあ
 まりなるべし彼につけ是につけ氣づかはしきは彼の人の事よ有りし日の對面の時此處に居

給ふとは思ひがけず郷里のことは我れ聞きたり辛苦きこそなるべけれど奉公大切に勉
 め給へと仰せられしが耳に残りて忘られぬなり彼れほどにお優しからずば是れほどまでに
 も歎かじと斷ち難き絆つらしとて人見ぬ暇には部屋のうち伏し沈づみぬ何れ劣らぬ双
 美人に慕はるゝ身嬉しかるべきを何を厭ふてか三郎かき絶て影も見せず疑念は重なる五
 月雨のくも、薄らぐべき由もなくて、世をうみ梅實の落る音もそゞろ淋しき日を幾日、を
 ぐらき窓のあけくれに、をち返りなく山時鳥の、から紅みにはふり出でねど、涙に袖
 の色かはるまで同じ歎きを別に知る主従の思ひきても果敢なし優子はいとゞ世を知らぬ身
 のお八重が素振り得も察せず氣の毒や我身大事にかけるとて瘦せ見ゆるほど心配させし
 和女の情は忘れぬなり左りながら如何ほど盡くしてくるゝ共なるまじき願ひぞとは漸
 《やうく》に斷念たり夫につきて又別に父様母さまへの御願ひあれど御二方なり和女
 なりに歎きをかくるが愁らきぞとてしみ／＼と物語りつお八重の膝に身をなげ伏して隠
 くしもやらぬ口説ごとにお八重われを忘れて抱き合ひ詞もなくよゝと泣きしがお前さまに
 その其やうな御覺悟させますほどなら此苦勞はいたしませぬ御入來の無きは不審しけれど無
 情き御返事といふにもあらぬを早まつての御考へは御前さまの様にも無し今しばしの御
 辛抱ぞ其うちには何ともして屹度お喜こばせ申べし八重が一心を憐れとも思しめして其

やうな悲しいことお聞かせ遊ばすなどて力を添へぬ優子嬉しく手に手を取りて前の世では
 何でありしやら兄弟にもなき親切この後とも頼むぞや是よりは別しての事何ごとも汝の
 異見に隨がはん最早今のやうな事云ふまじければ免してよと詫らるゝも勿体なく待てば
 甘露と申ますぞやと輕るげに云へど義理は重し袖に晴れ間は見えぬ物の限りあればにや今
 日珍づらしく鳶なきて雨の餘波に軒ばの露に照る日あたらしく玉をみがきて庭の木かげも
 心地よげなるを籠居てのみ居給ふは御躰にも毒なる物をとお八重さま〃〃に誘ひて
 邊りちかき野の景色田面の庵の侘たるも又をかしかるべし御覽ぜずやとわりなくすゝめて
 柴の戸めづらしく伴ひ出でぬ人の心のうやむやは知らずや茂る木立すゞしく袖に吹く風む
 ねに欲しゝ植はたす小田の早苗青々として處々々に鳴き立つ蛙の聲さま〃〃なる彼
 れも歌かや可笑しとてホ、笑む主に我れも嬉しく彼方の萱ぶき此の垣根お庭の中に欲しき
 やうなり彼の花は何ならんと小走りして進み寄りつ一枝手折りて一輪は主一輪は我れか
 ざして見るも機嫌取りなり互の心は得ぞしらず畔道づたひ行返りて遊ぶ共なく暮す日
 の鳥も寐に歸る夕べの空に行く雲水の僧一人たゞく月下の門は何方ぞ浦山しの身の上
 やと見送くれれば見かへる笠のはづれ兩女ひとしくヲ、と※びぬ

青空文庫情報

底本：「武蔵野 第三編」今古堂

1892（明治25）年7月23日出版

初出：「武蔵野 第三編」今古堂

1892（明治25）年7月23日出版

※変体仮名は、通常の仮名で入力しました。

※「優子」に対するルビの「いうこ」と「ゆうこ」、「嬢」に対するルビの「じやう」と「ぢやう」、「主様」に対するルビの「しゆうさま」と「しうさま」、「主従」に対するルビ「しゆうじう」と「しうじう」の混在は、底本通りです。

入力：万波通彦

校正：Juki

2020年4月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作ら

れました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

五月雨

一葉稿

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>